

コミュニティ・デザイン新論

「包摂か排除か」を越えて



インタビュー

〔龍谷大学社会学部講師／シチズンシップ共育企画代表〕

〔同志社大学大学院総合政策科学研究科教授〕

川中大輔

新川達郎

Kawanaka Daisuke

Niikawa Tatsuro

かつての経済成長を支えてきた中産階級の基盤が崩れ、流動化する日本社会。その構造的な変化はまた、世代間・階層間の分断や格差拡大を加速させつつある。課題を乗り越えていくために寛容性を高め、異質な「よそ者」たちを受け入れて混じり合い、新たな価値を生み出せる、そんな真に建設的なコミュニティの形は考え得るのか？同志社大学とCELの教育研究協力協定による「コミュニティ・デザイン論研究」講座で、講師を務められるおふたりとの対話を通じて、その糸口を探り、掘り下げていく――。

池永寛明・弘本由香里(大阪ガス㈱エネルギー・文化研究所)=聞き手
脇坂敦史=構成 宮村政徳=撮影

21世紀に入りいよいよ加速度的に進む社会構造の変化とともに、さまざまな面で不適合を起こしつつある日本の社会システム。そんななか、コミュニティを通じた問題解決にあらためて注目が集まり、とりわけコミュニティにとっての「よそ者」の関与が何らかの变化をもたらすのではないかと、この期待が少なくない。

「よそ者」の側面が、自他を取り巻く構造的な問題への批判的なまなざしをもつ必要がある。安直で相互依存的な関わりだけでは、さらなる分裂と排除、混乱を招きかねないからだ。あらゆる集団には、常に包摂性と排他性の双方の力が働いているのであり、その点を無視したのでは真に建設的なコミュニティ・デザインはおぼつかないだろう。

異質な者を受け入れ、「よそ者」と混じり合いながら新たな価値観を生み出すことのできるローカルな社会は、はたしてつくり出せるのか？

1950年と80年生まれ、世代もアプローチもまったく違うが、コミュニティというものが本質的にもっている正負の側面を考察し、あるべき「コミュニティ・デザインの形」を問い続けているおふたりに話を伺った。

原点としての「コミュニティ体験」

——新川先生は長年、地方自治や行政学、公共政策論といった分野の研究をされてきましたが、早くからソーシヤル・イノベーションや協働型ガバナンスといったものの役割に注目、その重要性を指摘されてきました。いわば、現在のコミュニティ・デザインを先取りされていたように思うのですが、そうした認識の背景には何があり、どのようなコミュニティ体験がもたらしているのでしょうか？

新川 私の研究それ自体は自治体や政策立案者と共に行うことが多かったのですが、常にそこに住んでいる人々はどう関わるかを意識してきました(図1)。学生時代に東北で出会った山村の暮らしが、もしかしたら原点かもしれません。田や畑の畦に植えてあるセリや大豆の育て方など小さな知恵のひとつひとつが、地域で培われてきた技術や知識であり文化であるという感覚です。そこで

生きる人々同士結びつきを支えるような古い仕組み、たとえば結や講[*1]といったものも残っています。たまたま私が研究で関わりを持った山間の地域では鶏を飼っている農家が多くて、農家のお母さんたちが卵を少しずつ持ち寄って、貯金していたのを覚えています。

——村の女性たちが、卵で一種の講をつ

くっていたのですか？

新川 その通りです。鶏を育てる営み自体は戦後から盛んになったのではないかと思えます。おそらく、それ以前は卵以外のものと同じようなことをやっていたのでしょう。そうやって貯めたお金で、彼女たちは農閑期に温泉へ行くのだ、と控えめに語ってくれました。こういう仕組みこそが、豊かな社会の象徴ではないでしょうか。当時の日本はバブル期で、研究の世界でもこういう小さな農村のコミュニティというのは「乗り越えるべきもの」という扱いをされるが多かったのですが、私にはそれが大きな可能性と見えました。——古い伝統が形を変え、時代に合わせ受け継がれていたのですね。

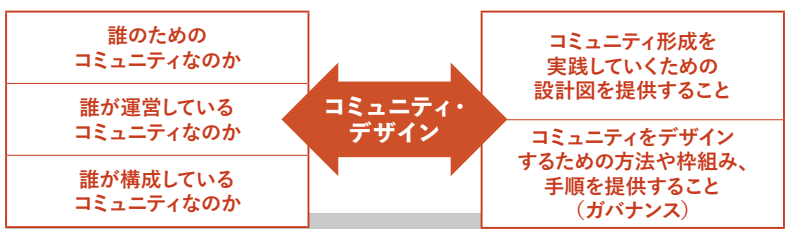
川中 私たちの世代になると、そういう原風景みたいなものはノスタルジーとして聞くことはあっても、経験としては希薄です。個人的には幼少期に育った長屋みたいな場所が比較的ウェットな記憶として残っています。その後はニュータウンのよう

な都会的な場所で育ちましたから私が必死で戦っていたのは、「基本的にこの社会は変わらない」というある種の共通認識でした。何かを変えたいと思って声に出しても、受け止めてもらえない。だから友達はみな、それをとっくに諦めてしまっ

いる状態でしたが、私はいつも「それはおかしい」と反発していました。——その頃、神戸で阪神・淡路大震災を経験されていますよね。

川中 中学2年生のときです。その後、2、3年が経過して落ち着きも出てきたところで、被災児童支援のボランティア活動を始めました。当時の神戸では、震災からの復興という特殊な状況ではあるけれども、市民が声を上げ、市民がリードして社会がつくられていく過程を間近で見

■図1: コミュニティ・デザインのあり方への問い



コミュニティ・デザインの問題を考える際は、地域に暮らすすべての人々を念頭に、問題解決への視点、自由と平等を前提とするシチズンシップに基づいた設計図と手順の提供が不可欠となる。

聞きすることができました。そのとき、「やればできる」「変えることはできる」と強く感じられた。ですが、どこへ行っても10代とか20代はほとんどいなくて、私が最年少でした。

——そうした活動が、若くして「シチズンシップ共育企画」というNPOを設立した原動力になっていったのでしょうか。川中 そうですね。現在は中高生など若者が社会参加できる場づくりに取り組んでいます。学生の頃、被災児童に加えて、不登校児や生活困窮世帯なども関わったことから私は、「周縁に追いやられてしまっている人々」が苦悩を感じている状況へも関心を寄せています。いわば「低きに立つ」コミュニティ・デザインを考えていかなければならないということですよ。

町内会からNPOへ、そして組織の終わりに?

——若き日の川中先生が感じられたというコミュニティの硬直性や、NPOがもつ可能性みたいなものを新川先生はどのように見られていますか? コミュニティの変化に直面しながら、そこに積極的に関わろうとする人々の考え方や態度は、どう変化していったのでしょうか? 新川 地域コミュニティ的なものの衰退は、私が研究を開始した1970年代よりも前から、ずっと

ている。近年、面白いことをやっている事例は、組織に背を向けて、個人やグループがプロジェクト型でつながっていることが多いように思います。

「よそ者」をうまく使うためには?

新川 自身、いわば「よそ者」としてコミュニティ・デザインに関わることも多いですが、そうした旧来の組織の衰退といった流れのなかで何ができるのか、常に考えさせられています。長期的に腰を据えるのは重要ですが、あまり地域に寄り添いすぎるとままずいかなと思ったり、あるいはまなざしを向けることそれ



言われていました。ある意味では、

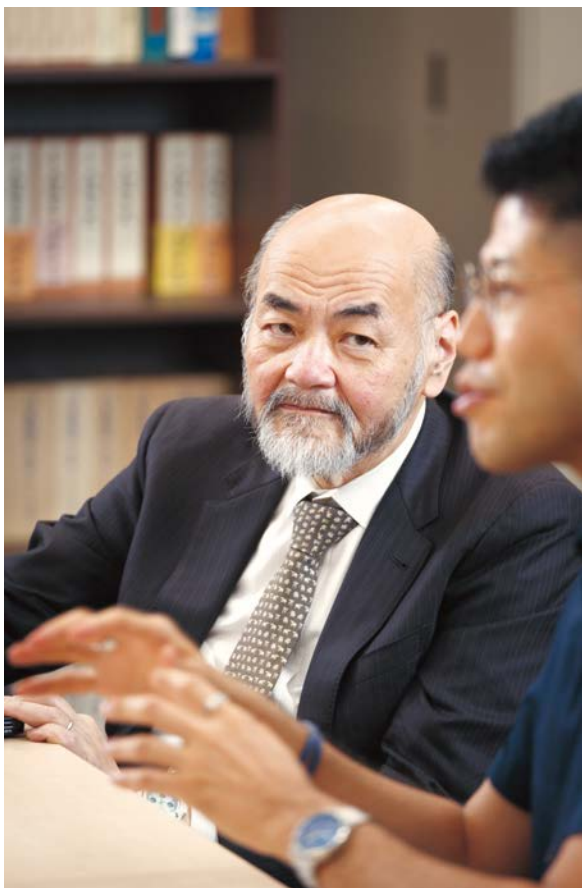
コミュニティがひたすら解体していくという同じ状況のなかで、「理想の地域社会」「あるべきコミュニティの再生」みたいなものが何度かクローズアップされ、繰り返し語られてきたのだと感じます。

現実には、もはや行政の末端組織としての地域コミュニティだけが残っていて残っているような状態にもかかわらず、地域コミュニティの価値はある種の幻想のように生き残り、その再生を目指すような「コミュニティ回帰」的な動きもたびたび強調される。また1990年代半ば以降には阪神・淡路大震災やその復興ボランティア活動があり、従来型の地縁組織とは異なる、たとえばNPOという新しい組織のあり方が注目されるようになったと思います。現在の町内会や自治会の加入率は、かつての80%から60%とだいぶ落ちていますが、全国に約30万団体もあり、その数だけは減っていません。一方でNPOは、この20年間で5万団体以上がつくられてきました。

川中 私には困ったときに助けを求めると、いわゆる「つながり」を必要とするとき、特定の近隣社会のなかでそれがかなえられる環境を形成するという志向性は、以前から希

自体が邪魔になっているかもしれない、と感じる場面も少なくありません。どういう距離感で、どう関わればいいのか悩みながら仕事をしています。——コミュニティ自体の捉え方やあり方にも揺れがあるなか、「よそ者」の役割や意義といったものを、あらためてどう考えられますか?

新川 「風の人の、土の人」という言葉もありますが、「よそ者」や「旅人」には当然のことながら固有の役割があると思います。江戸時代にお坊さんや文人が村にやってきて、新しい知恵や知識を伝えていくようなものです。けれども、今の社会がそういうように、コミュニティそれぞれ自体がどれほど固定的に見えても、



薄でした。むしろ市民生活にとって必要なネットワークを、多重的に圏域を超えて縦横無尽につくっていくようなイメージで捉えていたと思います。阪神・淡路大震災から20年以上がたち、行政もNPOの役割を真剣に考えることがスタンダードになりました。けれどもどこかで、公共の利益を市場原理にゆだねるようになってしまったのではないかと、この懸念はぬぐえません。本来は、市民の感性や視点を大切にしながら公共をつくりかえていくべきだったはずなのですが、NPOが企業化したり、行政化してしまっているようにも思われます。

——より良い市民社会のためのネット

結果的にそう見えるだけであって、常にダイナミックな変化のなかにあるということをお忘れるべきではありません。同時に、一定の高さをもつ敷居によってゲートキーパーして、外部からの人を選別するための仕組みもあるでしょう。

——逆に、「よそ者」が入ってきやすいような場やイベントを準備することもありますよね。

新川 ハレとケ「*2」でいえばハレの場、伝統的にはお祭りのときなどに「よそ者」との接触が増えます。あるいは何か極端な忌みごとや不幸、大災害があったときにも多くの「よそ者」が入ってくる。日本の地域コミュニティで「よそ者」に注目したのは、高度成長期の過疎振興政策が最初ではないでしょうか。以来、地域の疲弊や危機意識のなかで、それをかき乱してくれる「よそ者」の存在が、一定の価値をもちうる可能性が出てきたと思います。

川中 そういう危機意識があるからこそ、たとえばあちの村で「道の駅」が流行ったから、うちの村でも同じような商品開発をやろう!みたいなことも起きる。しかし、振れ幅が大きすぎて、地域の歴史・文化との連続性もなくなってしまうことが多々ある。コミュニティにとって「変えてはいけないもの」とは一体何だろうか?とよく考えます。

ワークづくりだったはずが、いつのまにか下請けサービス業者のようになっていくことも少なくない、ということでしょうか?

川中 そういう意味でも、コミュニティをどうやってつくっていくか?地域の住民をどう巻き込んでいくか?みたいな視点が、あらためて求められているのかもしれない。さらに強く感じるのは、現在のNPO活動は組織化を強く推し進めたあまり、組織を維持するためのメンテナンスに大きな力を割かなければならない状況に陥ってしまったのではないかと。これはネットワーキングとしての市民活動だったものが、組織の論理を前面に出すことになっ

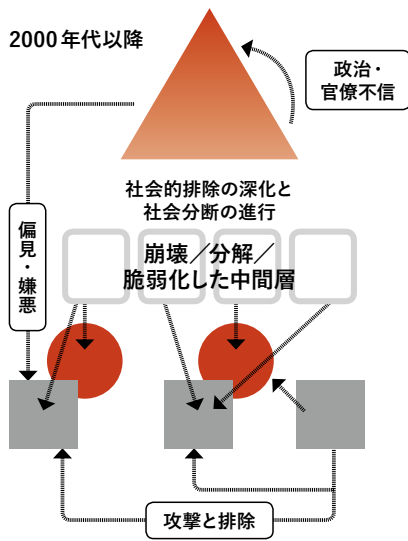
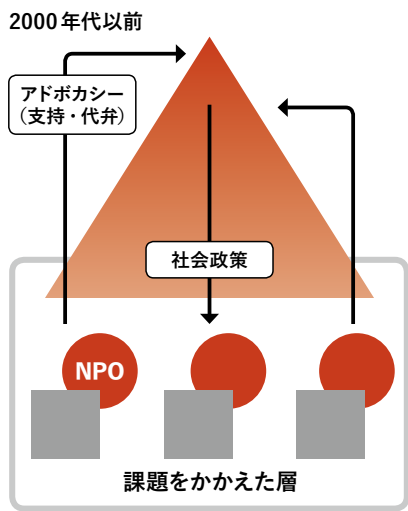
新川 それを守るために、外の知恵をどんどん借るということも可能になるでしょう。自分自身の暮らしや、これまで生きてきた条件までを否定してしまうと、ある意味では根無しになってしまう。「内と外」という構図も消えてしまう。「よそ者」という刺激は大切かもしれませんが、本当に地域をつくらせている担い手が、自分の暮らしをそこでつくっていくことが前提になれば意味があります。

川中 コミュニティに「よそ者」として関わる際には、地域のことをよく知っている「プロデューサー」が大切だと考えています。よいプレイヤーが中心になることもあるでしょうが、プレイヤーというのは地域のなかで浮き上がってしまいがちです。むしろ、そういう人のこともよく知っていて、「よそ者」とうまく結びつけてくれるような力をもった人が、大きな役割を担うことが多い。

「内なるよそ者たち」に目を向け、耳を傾ける

——「自身があるコミュニティから「よそ者」として扱われることによって、得られた気づきはありますか? 川中 当たり前ですが、まず感じるはその場所に特有の「居心地の悪さ」です。でも、私はそれをとても大切だと思っています。なぜかとい

■図2：コミュニティ・デザインは攻撃と排除を越えられるか？



2000年代以降、急激に分断の進む社会——その周縁にあって課題を抱えた層は、いよいよ排除や攻撃の対象にされつつある。NPOをはじめとする新たなコミュニティ・デザイン構築に対する期待は大きい。出典／川中大輔「市民による社会貢献」と社会的企業」(2018年)

うと、この「居心地の悪さ」を地域のほかの誰かも感じているに違いはないと考えるからです。それは若者かもしれないし、新しい住民や在日外国人か、女性かもしれない。また、その居心地の悪さを感じている人だけでなく、私の目から見て「あ、この人面白い」と思うような人を見つける役割も重要だと思っています。固定化された関係のなかで、「あいつは、こういうやつだよ」みたいな認識にとどまっているものを、「面白い」と言う。

——どちらも、「内なる他者」というか、同質なものだと思っていたコミュニティのなかに異質なものを見つけて、当たり前と思っていることを変える役割ですね。川中 社会やコミュニティのなかで「周縁化」されている人たちというのは、システムの問題点にいちばん気づきやすい存在でもあると考えています。たとえば、非正規雇用者や

在日外国人たちにとっての生きづらさが、この社会の課題をよりはっきりと示してくれている。そこで示された課題と向き合うコミュニティ・デザインの実践が大切ですね(図2)。新川 そういう「差別」の構造を、私たち自身が再生産しつづけている。そして、自分も「周縁化」されたひとりかもしれない。そこから考えたとき、コミュニティそのものをつくり変える大きなチャンスがあるのだと思います。言い方としてはあまり好きではないのですが、社会的包摂(ソーシャル・インクルージョン)というのはたぶん、そういう考え方がいいでしょう。

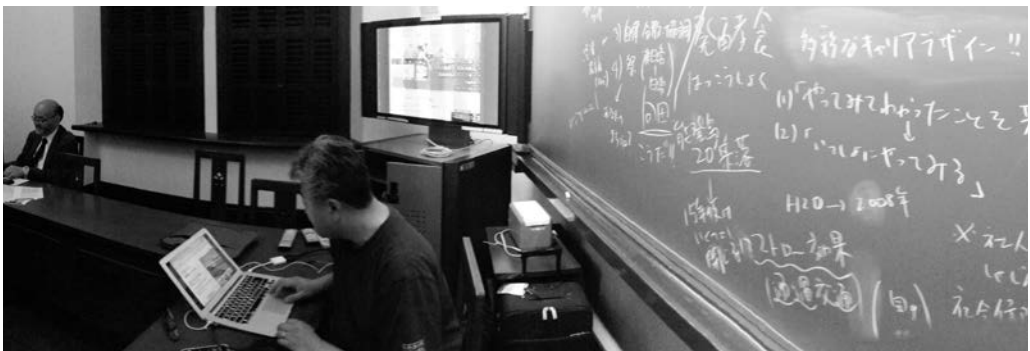
川中 コミュニティ・デザインという一般的なにすぐ地域の人たちを集めて、ワークショップをやりますよ、みたいな感じになるんですけど(笑)、「はい、何かしゃべってください」と言われても声を出せない人

は多くいます。それに、そもそもこの場に来れない人は誰なのか？ということ踏まえたうえで話し合うことができるかどうか。——いわば不在者がいけばんの他者ということになるわけですね。

川中 その通りです。その存在を想像するのはとても難しいことですが、今は本だけでなく、インターネットを通じて多くの当事者が一次情報を出すようになってきているので、少なくともそういうものを探して向き合っていく感性が大切でしょう。同時に、話すことに価値がおかれすぎている現代のコミュニケーション観も変えていく必要があると私は考えています。会議で自分の考えをうまく話すだけでは、話し手の中で何も変化しない。むしろ、ほかの人の意見を聞いて「あ、その考えがあるのか」となったとき、初めて人は変わることができると、話し合いの意味

コミュニティや居場所が大切だとか、それを言われるのが腹立たしいのだそうです(笑)。本人は課題があってもなかなか声に出せないから、おせっかいに見えても関わっていくことが必要なこともあるのですが、それに対する反発も当然あるわけですから、やはり「ひとりぼっち」の価値も含め、本人の意思表示も最大限に尊重されることが求められているのだと思います。こうした「間合い」にも敏感でありたいものです。

新川 現実には、私たちは何かコミュニティ(共同社会的)な共通性がなければ生きていけないし、いつもどこかでコミュニティと関わらざるを得ません。だとすれば、あらゆる種類のコミュニティが生まれ、壊れ、毎日つくりなおされていると考える方が、実態に合っているでしょう。一方でコミュニティは、支配者にとって都合のよい支配の道具にもなりえます。ひとりひとりの個人がコミュニティを選び、それをコントロールすることができるとか。個人の顔が見えないコミュニティの危うさとともに、考えていかなければならないのではないのでしょうか。そういった個人の選択までも含めた大きな意味でのコミュニティ・デザインが求められているのではないかと、今は思っています。



同志社大学大学院総合政策科学研究科とCELの教育研究協力協定による連携講座「コミュニティ・デザイン論研究」では、毎回、激変するコミュニティの最前線と切り結ぶ実践者や研究者を講師に迎え、問題解決への知を共有する試みが続けられている。撮影／山口洋典

かに、私自身が今まで気づけなかった真実を発見することも多く、すぐく勉強になるなど思いながら授業をつくっています。

——建築や災害ボランティア、多文化共生など、扱われるテーマも多彩ですね。

も出てくる。話すことではなく、聴くことを重視したコミュニケーションをどうつくっていくか。それが大切だと思っています。

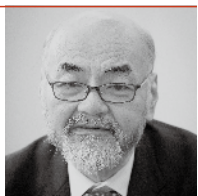
**流行に終わらない
コミュニティ・デザインを
目指して**

——同志社大学大学院総合政策科学研究科とCEL(大阪ガス(株)エネルギー・文化研究所)の教育研究協力協定により2010年に開講し、おふたりが講師を務めておられる「コミュニティ・デザイン論研究」講座についてお話を聞かせてください。ここではコミュニティの負の側面にも目を向け、異分野を横断し、実践者と研究者が混じり合いながら企画・運営がなされています。この講座を組み立ててきた、新川先生ならではの理念が色濃くにじみ出た画期的な試みだと思いますが、いかがでしょうか。

新川 単に講義をする、講義を聴くということだけでなく、私たち自身も学生と共に学びとっていくことのできる機会をつくりたいと思います。始めました。理想としては、学生が先生となり、先生が学生にもなれるような場。双方のコミュニケーションを大切にしながら、研究者だけでなく実践者の方にも多く入っていたらいい。実務に即した議論を活発に実践者の方たちの素朴なやり取りのな

——デザインされたものを批判的に検討し、新しく創造するためのコミュニティ・デザインを起動するヒントを、おふたりからたくさんいただきました。本日はどうもありがとうございました。

注 *1 共同体内における結びつきや会合で、相互扶助や共同作業をその目的とした。
*2 民俗学者の柳田国男によって見出された概念で、ケはふだん通りの日常、ハレは祭礼や行事などの特別な日を指す。



新川達郎
にいかわ・たつろう

同志社大学大学院総合政策科学研究科教授。1950年生まれ。愛媛県松山市で育つ。専門は地方自治論・行政学・公共政策論。東北大学大学院情報科学研究科助教授などを経て現職。NPO法人日本サステイナブル・コミュニティ・センター代表理事。編・著書に『地域力を高めるこれからの協働』(第一法規)、『コミュニティ再生と地方自治体再編』(ぎょうせい)などがある。



川中大輔
かわなか・だいすけ

龍谷大学社会学部講師/シチズンシップ共育企画代表/日本シチズンシップ教育フォーラム運営委員・事務局長。1980年、神戸市生まれ。1998年から青少年支援、環境・まちづくり・市民活動支援の活動に取り組み、2003年に「市民としての意識と行動力」を育む学びの場をつくる「シチズンシップ共育企画」を設立。全国各地でワークショップを開催している。共著に『シチズンシップ教育で創る学校の未来』(東洋館出版社)などがある。